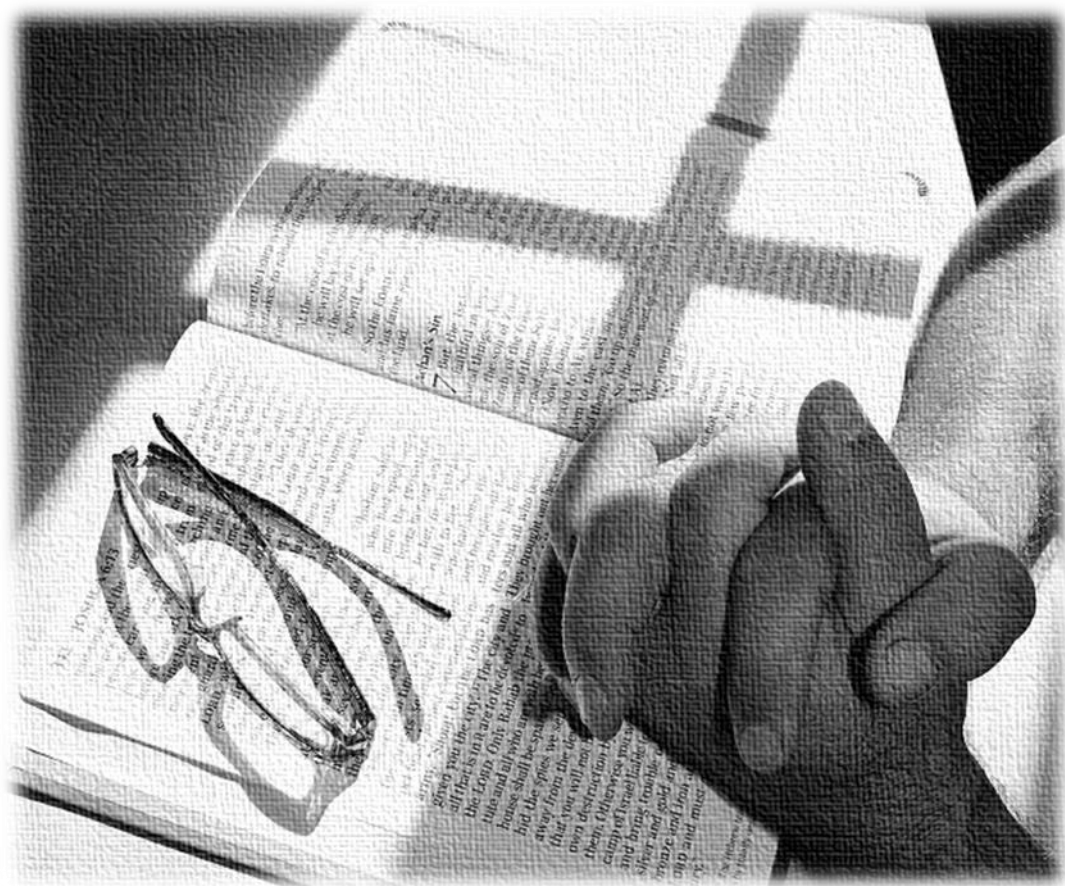


「希望」を伝えるために ～信仰基準の意義と解説



第二版によせて

このたび、『希望』を伝えるために『～信仰基準の意義と解説』を再出版することができましたことを心から感謝いたします。

このブックレットは2002年に関東地区で出版されたもので、初版出版の経緯は「まえがき」と「あとがき」に詳細が記されています。当時は印刷した部数が終わったら増刷はしない計画で出版されたため、数年の間、このブックレットは関東地区からも姿を消していました。

初版出版当時学生だった私はブックレットを手にすることができ、2015年の新主事研修で「学生規約と信仰基準」という研修を担当した際に改めてブックレットを開き、その内容が信仰基準の意義と内容を明確に解説する充実したものであることを実感しました。そして、現在のKGKやKGK学生を取り巻く環境にあって、このブックレットの内容は今後も継承していきたいという願いが起こされました。

今回は、内容には手を加えず、誤字脱字を中心に修正を加えました。また、初版は関東地区で出版されたものであったため関東地区の文脈で書かれている箇所もありますが、信仰基準そのものは関東地区の規約から抜粋したものから統一信仰基準に変更しています。加えて、執筆者や文面に登場する方々の肩書は当時のままになっています。

宣教の働きが多様化している現在、KGKにおいてもキリスト教他団体との関わりの機会が増えている中で、KGKは何を軸としているのかを確認することは大切なことでしょう。また、宣教協力という面だけでなく、異端の教えとの違いを明確にし学生たちが守られるためにも「自分たちは何を信じているのか」を理解していることは重要なことです。そのような意味でも、このブックレットが信仰基準の意義と内容を理解するために用いられることを願っています。

このブックレットのために執筆された服部滋樹先生、油井義昭先生、小林基人先生、また初版の出版のために労された2002年規約問題委員会と委員会を担当された吉澤慎也主事に心から感謝いたします。

2016年2月
関東地区主事 浅田美由紀

「…そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、
だれにでもいつでも弁明できる用意をしておきなさい。」

ペテロの手紙 第一 3章 15節

まえがき

今回、関東地区での統一信仰基準採択を機に、このようなブックレットが作成されたこと、またNC（全国集会）を目の前にして発行できたこと、すべてが主の計画の中にあったことを信じ、心から感謝します。

1973年3月のNCをきっかけに、全国的な運動としてキリスト者学生会（以下、K G K）の意識が高まり、信仰基準を全国で統一しようという動きから、1970年代後半に統一信仰基準が作成されました。ところが関東地区においては、今年に至るまで、この統一信仰基準とは異なる信仰基準を採用してきました。

そして2001年、関東地区の12月総会において統一信仰基準採用の提案がなされました。それは、K G Kの統一性を示すことを目的の一つとしていました。新しく提案された統一信仰基準は、キリスト者学生が「教会との関係」や「罪の贖い」について考えるきっかけともなりました。この一連の動きは、数年前に規約問題委員会が結成されてから具体的に始まり、今年6月の臨時総会での信仰基準改正に至りました。今回このように、関東地区で統一信仰基準が採択されたことは、全国的な運動としてのK G Kを会員の中に印象付けました。

私たちは目には見えなくても、諸先輩方より「信仰の遺産」を受け継いでおり、またそれを次の世代に引き継ぐ使命を与えられています。その中で大切なことはただ単に継承するのではなく、「信仰基準」によって信仰の中身を常に吟味していくことなのです。

時代とともに移り変わる環境の中、K G KをK G Kたらしめるものはなんのでしょうか？また、わたしたちは何を信じ、何を伝えていくのでしょうか？本冊子はこの問いかけが今回限りで終わらず、これからの学生の間でいつまでも追求され続けていくことを願い、作成しました。左に載せた御言葉にもあるように、私たちに既に与えられている「希望」をお互い確認し合い、どんな状況になっても揺るがないものとして信仰が確立され、主の業がさらに広がっていくことを期待します。

最後に、このブックレット作成にあたられた方々の御労に心から感謝いたします。本冊子がキリスト者学生に豊かに用いられることを祈りつつ。

2002年11月

規約問題委員

宇田川 知恵（明治学院大学4年）

目 次

まえがき	1
目次	2
信仰基準	3
第Ⅰ部 信仰基準の今日的意義	4
K G K 東海地区・北陸地区主事 服部 滋樹	
第Ⅱ部 統一信仰基準解説	10
第1章 概論	11
第1節 序	11
第2節 信仰基準—その定義と目的	12
(1) 信条と信仰告白	
(2) 信仰基準	
第3節 K G K の信仰基準—その必要性	15
(1) 超教派運動における信仰基準の必要性	
(2) K G K における信仰基準の意義	
第4節 統一信仰基準成立のいきさつ	18
(1) K G K 信仰基準の成立	
(2) 信仰基準の統一化へ向って	
第5節 統一信仰基準の基本的性格	21
第2章 解説	24
第1節 聖句の引照	24
第2節 序文解説	25
第3節 本文解説	26
(1) 第一項 聖書	26
(2) 第二項 神	28
(3) 第三項 イエス・キリスト	30
(4) 第四項 罪と救い	32
(5) 第五項 神の恵みと聖霊	34
(6) 第六項 教会	35
あとがき	37

キリスト者学生会統一信仰基準

本会は初代教会の公同信条と、宗教改革運動により誕生した福音主義諸教会の信条と信仰告白とにおいて表明された歴史的キリスト教信仰をその立場とし、次の信仰基準を設ける。

- (1) 旧新約聖書六十六卷は、神の選ばれた聖書記者たちによって、神の靈感のもとにするされた神のことばであって、原典において誤謬を含まず、信仰と生活の唯一の規範である。
- (2) 唯一のまことの神は、父、子、聖霊の三位にして一体であり、全能の主権者、創造主である。
- (3) わたしたちの主イエス・キリストは、まことの神でありまことの人である。主イエス・キリストは、処女より生まれ、罪人の身代わりとして贖罪の死をとげ、肉体をもって死より復活し、父なる神の右に座し、再び栄光のうちに来臨し、すべての人を裁き、神の国を完成する。
- (4) 人間は、墮落以来、みな罪のなかにおり、わたしたちの主イエス・キリストの贖罪のみわざによってのみ罪から救われる。
- (5) 救いは信仰のみによって受ける神の恵みである。罪人は聖霊によって新生させられ、きよくされ、その救いを完成される。
- (6) すべて救われた者は、キリストの体である教会に属し、一体である。

第 I 部

信仰基準の今日的意義

信仰基準の今日的意義

K G K 東海地区・北陸地区主事 服部 滋樹

I. なぜ信仰基準か？

K G K は伝道する運動体である。何をどう信じているかについてそれを言葉で、たとえ個人の経験を語るにしてもできる限り客観的な言葉で説明する必要がある。なぜなら福音宣教は受け手志向でなければならないからだ。そして私たちはそれを単独ではなく、相互の協力によって行う運動体である。

関東地区卒業生会の機関誌は「コイノニア」という名称である。これはギリシャ語でふつう「交わり」と訳される言葉である。しかし、聖書の述べる「交わり」とは不特定多数が無目的に集まるサロンのことではない。「コイノニア」とは元々新約聖書の時代の地中海世界では商業用語であった。志のある者が集まって何らかの事業（ビジネス）を興す際、出資し合うことが「コイノニア」であった。だから使徒パウロはローマ書 15 章 26 節で、「それは、マケドニアとアカヤでは、喜んでエルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために醸金（きょきん）すること（コイノニア）にしたからです。」とコイノニアという言葉を実際の意味に近い使い方をしていて、他方、パウロは彼のペリピ書の中でコイノニアまたはその派生語を多用し、それを新約聖書的な用法に変更し、新しい意味でコイン（造語）している。例えばペリピ書 1 章 5 節で「あなたがたが、最初の日から今日まで、福音を広めることにあずかって来たこと（コイノニア）を感謝しています。」と言っている。福音を広めるといふ共通の目的のために、パウロとペリピの信徒たちが賜物や労力や犠牲を出し合って協力してきたことをパウロは「コイノニア」即ち交わりと呼んでいるのである。K G K の交わりには福音についての共通の理解、そしてそれを伝え広めるための共通の認識が必要なのである。私たちが何を信じ、そしてそれをどう伝えるかということについて共通の理解と認識があって初めて「交わり」が成立するのである。そして信仰基準とは、交わりの基盤・土台を確認するステートメント（声明）なのである。

II. 信仰基準とは何か？

信仰基準の事柄を取り上げる時、よく質問されるのが「信条」や「信仰告白」との相違である。字数の関係でそれぞれを詳しく説明する余裕がないが、クラス・ルーニア著「使徒信条の歴史と信仰」（いのちのことば社）に記された要約が有益であろう。

1) 信条： 一人称単数形（「我」）の個人的信仰者の告白。

信仰告白： 主として信仰者のグループ、もしくは教会全体。従って一人称複数。

2) 信条： 元来、教会の礼拝に組み入れられるように考えられた。

信仰告白： 礼拝よりはむしろ教えのための神学的文書として意図された。

3) 信条： 神に対して語られ、神と神の真理について述べる。

信仰告白： 同胞に対して語られ、逸脱した見解に対抗して、真理の諸側面が強調される。

4) 信条： とても短く、信仰の主要点が言及される。

信仰告白： やや広範囲に及び、信条で言及された真理について詳細な説明がなされる。

5) 信条： 歴史的に、信条は全教会一致のしるし。

信仰告白： 歴史的に、宗教改革およびそれ以降は教派的色彩が濃い。

(以上、上掲書 p.9~10 参照)

信条には、「使徒信条」、「ニカイア信条」、「アタナシウス信条」などがある。正教会などの東方教会と、カトリック教会やプロテスタント諸教会などの西方教会との間には若干の見解の相違はあるものの、古代信条の告白においては教会一致のしるしと呼んで差し支えないであろう。信仰告白には例えば、ルター派教会のアウグスブルク信仰告白、改革派教会のウェストミンスター信仰告白、ハイデルベルク信仰問答などがある他、英国国教会の三十九箇条などがある。信仰告白には確かに教派的特徴が見られるが、各信仰告白間に依然として存在するかなりの共通性や合意事項にもきちんと注目すべきであろう。

では信仰基準イコール信条・信仰告白であろうか？ K G Kの信仰基準に目を通すなら確かに信条の持つ性格、信仰告白の持つ特徴などを有している。けれども、信仰基準は必ずしも信条や信仰告白の性格や内容にすべてマッチするわけではない。信条のような公同礼拝性が強いわけでもなく、信仰告白のようなある特定の教派色が強いわけでもない。何よりK G Kは「教派協力による伝道の運動体」という特殊な性格を持つ団体である。規範性は最大公約数的でなければならない。

では信仰基準をどう理解するか？ 私たちは「信仰基準」という名称で呼ぶが、例えばK G Kと同じI F E S (国際福音主義学生連盟)に加盟する英国キリスト者学生会(U C C F)の場合、信仰基準に相当するものは“Doctrinal basis”つまり「教理的な土台・根拠」と表現している。これはなかなか分かり易い。信仰基準の「信仰」とはつまり、使徒ペテロが「説明すべき希望」(ペテロの手紙第一 3章 15節)と表現した福音の根本のことではないか。そして教理とは、信仰のエッセンス、つまり「整理され体系化された聖書の使信」のことである。しかし信仰基準は教理ではあっても細部までカバーする網羅的なものではなく、運動または団体の構成員の性格とその条件を示す最低限度の規範として捉えるべきものでもある。K G K協力主事・J E C A長津

田キリスト教会牧師の油井義昭師は次のように述べている。

「信仰基準は、公式なあるいは教会的な意味で信条や信仰告白として認められないものであって、信仰基準の採用は、キリスト者の兄弟はどこまでかという限界を権威をもって定めるということではなくて運動や交わりの中に加わろうと願っている一群の人々を示すものにすぎないということをおぼえるべきである。信仰基準の中である信条や教義の選択は、他の信条や教義を除く結果になるが、選んだものだけが重要な真理の全体を構成するということでも、又、除いたものが大して重要でないという意味でもないのである。」

信仰基準とは、K G Kという伝道団体に土台の安定性（聖書による権威の根拠の明示）、宣教志向性（信じる根拠の内実）、異なった教えを見抜く健全性（聖書論、神論、人間論、キリスト論、救済論、聖霊論、教会論、終末論）を与える運動の枠組みである。それは召されたキリスト者が聖書の福音を根拠に交わりを持つためである。

III. 信仰基準の今日的意義

唐突に賛美歌の歌詞で恐縮であるが、以下の内容を持った賛美歌をご存知であろうか。

He lives! He lives!	生きておられる！ 生きておられる！
Christ Jesus lives today.	キリスト・イエスはきょうも。
He walks with me and talks with me along the narrow way.	共に歩んでくださり、共に語ってくださる。 人生の小径を進む時
He lives! He lives!	生きておられる！ 生きておられる！
Salvation to impart.	救いを与えてくださるために
You ask me how I know he lives,	どうしてそれがわかるのか
he lives within my heart.	主は私の心におられるから。

なかなか良い賛美であると思う。けれども、最後の二行はいささか注意が必要である。「どうしてそれが（主が生きておられることが）わかるのか。（なぜなら）主は私の心におられるから」なんとなく作者が歌詞に込めた意味が伝わって来るが、これで本当に十分だろうか？ よみがえりのキリストが生きておられるということが、あなたのそして私の<<経験>>の中だけの出来事なのだろうか？ 経験が経験として自己の中で完結しているのなら、それは外部つまり信仰の世界の外にいる者にはチャンネルを持たないことになる。使徒ペテロは彼の書簡の中で「・・・そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意

をしていなさい。」(ペテロの手紙第一 3章15節)と奨めた。つまり、私たちの信仰の根拠は各自の経験のみならず、より客観的な言葉でもって外部の人に説明されなくてはならないのである。ポストモダンの状況と呼ばれる今日、真理はますます個人主義化し、断片化される傾向にある。移り変わる状況の中で、普遍のもの永遠のものを証していかなければならない。

ここで急いで説明すべきことがある。それは今日、多くの人が信仰基準や教理、信条・信仰告白を冷たく無機質的なものと見る傾向である。礼拝・典礼を愛する人は多い。だがなぜか教理・教義は敬遠される。教理と神礼拝は対立的なものなのだろうか？ 悲しくもこれは不幸な誤解である。教理(や神学理論)がまずあって礼拝を規範してきたのではなく、教会の歴史から見ればむしろ教理は礼拝の中で生まれ発展してきたからである。例えば、パウロによるピリピ書2章6～11節は「キリスト賛歌」と呼ばれる箇所であるが、そこは美しい韻律でつづられていて、パウロが当時の教会で歌われていた賛美歌の歌詞を引用したと認める聖書学者は少なくない。他方この箇所をよく観察すると、6節ではキリストの謙卑、7節ではキリストの受肉、8節ではキリストの十字架、9節ではキリストの昇天、10節ではキリストの栄化、そして11節では(キリストの再臨時の)信仰者の告白という終末観がそれぞれ織り込まれ、この部分が当時の賛美歌の引用であるなら賛美という礼拝行為と教理・神学が渾然一体となった姿を見ることができる。少なくとも初代のキリスト者たちにとって礼拝と教理は表裏一体の関係であったのである。前述のクラス・ルーニアは次のように述べる。

「キリスト教会が、その信仰を確実な拘束力を持つ定式に定めるよりずっと以前から、まさに同じその信仰は、典礼の中で唱えられ、告白されていたのである。(中略) 教義というものは、決して知性のみを満足させようとして抽象的定式化を意図したのではなく、まさに最初から教会が礼拝において神にささげた賛美の歌の一部だったのである。」(前掲書 p.8)

換言すれば、KGK内で歌われる賛美が真に礼拝的賛美であるなら、それは同時に教理的であり神学的であるはずなのである。信仰基準が福音の内実であるなら、賛美はその内実に即したものが選ばれささげられなくてはならないであろう。仮に賛美に込められた人間の経験を「物語」とするなら、物語の真偽を試すのは教理であり、信仰基準である。なぜなら物語にはノンフィクションもあればフィクションもあるからである。

IV. 結び

信仰基準の必要性、重要性は今までの議論でそれなりに理解いただけたと思う。ただ、信仰基準は経験の解釈や真偽を試す単なる道具ではない。信仰基準それ自体が聖書の物語を喚起し、私

たちを神礼拝へと導くことを最後にぜひ強調しておきたい。ひとつの例として、信仰基準の中に「主イエス・キリストは処女より生まれ、・・」というパッセージがある。単に教理的に定義すれば「キリストの受肉の教理」であるが、この部分が語りかけることは果たしてそれだけであろうか。キリストが人となって私たちの間に住まわれた（ヨハネ福音書 1 章 14 節）ということは、

「神が我々に歴史において出会うということ、我々に歴史に関与する者として語りかけるということである。受肉の教理が主張するのは、イエス・キリストの物語が神の物語でもあるということなのである。（中略）神は我々の時間と空間の世界に真にかかわったのであり、歴史の中に本当に入ってきたのであり、我々のいる場所において我々と本当に出会ったのである。」

（アリストター・マクグラス著「キリスト教神学入門」 p. 235～236）

信仰基準に列挙された教理的内容は単なる聖書啓示のデータベースではない。教理が聖書解釈の枠組みを与え、逆に聖書の物語が教理を生き生きと鮮やかなものにする、この循環的な関係こそ私たちの日々の静思の時、そして学内聖書研究において応用されるべきであろう。K G Kにおける信仰基準、ひいてはおおよそ教理的・神学的なるものが学生諸君の間で真に見直される時が訪れることを切に願っている。

第Ⅱ部

統一信仰基準解説

第Ⅱ部統一信仰基準解説は、1976年に主事会によって作成された解説書をもとに加筆修正して再収録したものである。今から約30年前の文章ではあるが、現代のK G Kの実状にも即していると考えられたため、基本的には原文のまま掲載することに努めた。

I 概論

1、序

この解説書は、キリスト者学生会に属する大学生、卒業生、その他の関係する人々が、K G Kの信仰的立場について明確に学び、K G K活動の指導精神のガイドブックとして用いることが出来るために書かれたものである。

キリスト教界では、教会の信仰告白や信条に関する多くの手引き書が出版されている。確かにそのようなものも必要である。然しながらK G Kを構成する福音的諸教派を代表する多くの学生、卒業生の信仰的コンセンサス（一致）は何であるか、という事に関して、組織的に総括的な理解を得たいと願っている多くの人もいるわけである。

解説書の中心は歴史的教会によって受け入れられてきたキリスト教信仰のエッセンス（本質）の取り扱いと、そのK G Kの立場との関連における叙述である。キリスト教は継続的な歴史的信仰である。キリスト教は、賢明だとか善なるものとして受け入れられた人間的概念の体系ではなく、歴史において神によって行なわれた御業に対する証しである。ここに継続的な要素があると信ずる。

継続された教理の論争と再宣言をする時、キリスト教真理の一つの純粹な面を、他の補足的な真理を犠牲にしてあらわした極端な見解が常にあった。真理の不均衡な宣言は常に誤っている。更にキリストの衣を改善しようという試みが、キリスト御自身を変えてしまった時にはいつも、キリスト教と非キリスト教の要素の混合があった。然しながら、各時代のキリスト者の解釈の中に中心的、総括的、そして均衡のとれた立場があり、歴史の中でキリストの最初の宣教から今日まで、この中心的立場を一本の長い糸が結んでいるのを見る。歴史的福音主義的キリスト教の立場がそれである。

ところで我々は『今日のプロテスタントの弱点の一つは、ほとんどのプロテスタントが自分が「何を」信じているか、又、「何故」信じているかを知っていないということである。』（ホーダン、A Layman's Guide to protestant Theology P XVii）という非難に傾聴すべきではなかろうか。今日、日本では、福音主義的な教会においても、一般的に信条や信仰告白を重要視しない傾向があるからである。

多くの人が、信条や信仰告白と、自分の信仰とを直接関係ないと感じるのは、信仰を自分の心の事柄としてのみ捉えたり、自分の信仰体験を信仰の基としているが、その体験を聖書の全体的な教えの上に基礎づけたり、吟味することがないからではないか。また、信仰を自分と神との人格的な関係として、その個人的な性格を強調するが、自分がイエス・キリストを信じて救われたことが、キリストの体なる教会に加えられたことでもあるのを十分に考えない時にも同じ傾向は出てくるだろう。キリストの体なる教会に加えられることは、通常、現実の歴史的な教会につながることであるから、教会の一員とされたことを真剣に受けとめてゆくと、その教会の信条や

信仰告白について考えざるを得なくなる。然しながら、信仰の主観的、体験的、また個人主義的片寄りが信条や信仰告白へ無関心にさせていることが多いのではないか。このような信条軽視の特徴はプロテスタント教会の体験重視の傾向や信仰告白や信条の「化石化」による信仰の現実からの遊離の傾向の中に見られないだろうか。

この信仰基準解説書は、K G Kがその霊的戦いの歴史の中で告白されてきた信仰を、現在の我々がダイナミックなものとしていこうという意図から生まれたものである。我々は何に基づき、いかなる意味で神の子であり、救い主であるイエス・キリストを信じるか、緊張の中で告白し、証しすべく召されている（I テモテ 6:12, 13）。現在の状況で、特に何を強く告白しなければならないか、そして、その告白は、どのような言葉で、行動で表明されねばならないか、歴史的遺産としての信仰基準の意味するものを学び、受け継ぎ、同じ体に召された兄弟姉妹と追求してゆきたいと願っている。

2、信仰基準—その定義と目的

(1) 信条と信仰告白

信仰基準とは何であるかを知る上で、又、知る前に、信条と信仰告白が何であるかを理解することは大切であると思われる。信条（Creed）という言葉は「私は信ずる」というラテン語の *credo* という言葉から出たもので、信仰告白とか信仰の箇条を意味する。ケアンズによれば「信条とは信仰を公けの使用のために声明したものである。それには救いと教会の神学的安定とに必要な項目が含まれている。信仰の正統性を試し、仲間同志であることを認め、信仰の本質的教義の手頃な要約として役立った。活きた信仰を前提とし、それを知的に表現したものである。教派的な信条は宗教改革時代にあらわれた。融和的或いは普遍的信条は、313年～451年の間の神学論争時代に全教会の代表者達により見られた。（中略）信条はすべて、聖書内の信仰と実践との神聖で絶対的な規則を、相対的・限定的に表現したものである。（基督教全史 p. 164）」

信仰告白（Confession）とは、イエス・キリストに対する自己の信仰を明白な言葉をもって言い表すこと、それは同時に、教会が自己の信仰を成文化したものをも意味する。プロテスタント教会の諸信条は信仰告白と呼ばれるのが普通である。信仰告白は、共通の信仰の集合的公式として、聖書の教理が教会によって理解され教えられる様式についての公けの証詞である。

「個人の信仰の告白は自己の責任と決断によって、教会の信仰告白に同意を表明することによって成り立つ。・・・信仰告白は主観的な信念といったようなものではない。宣教のこぼれを聞き、『汝これを信ずるか』と問われ、『我信ず』と応答することでなければならない。信仰告白は他からの強制によるものではない。主イエス・キリストに対する信頼と服従の決断であること、そして賛美と感謝に満ちたものであることが要求される」（キリスト教大辞典 p. 565）。

信条と信仰告白は別々のものであるが、互いに置きかえて使われるようになっている。教会の

信仰告白は、神の啓示についての基本的なキリスト教思想の結実である。これを教義と呼ぶのである。教義は教会が受容した最終的な主張ともいえる。教父は信頼し得る権威ある信仰の教理を、哲学者や異端者の意見にすぎないものと対比させて教義といった。その後ニカヤ信条が最も厳密な意味での教義とみなされるようになったのである（ハイック、キリスト教思想史 p. 3）。

信条と信仰告白は、承認のために公布された一群の教理、信仰の箇条である。信条は個別なものか、集合的なものかのどちらかである。教会の大信条は教会の内部より起った。信条は長期間にわたって多くの信仰者が試み、明白で簡潔な声明に公式化した、教会の集合的経験を凝縮している。信条と信仰告白は、その生命を聖霊によってイエス・キリストに負う教会の宗教経験の成長結果をあらわしている。信条と信仰告白は、教会が神のみことばの解釈と誤謬に対する防備において到達した結論である。教会の偉大な信条は純粋な確信をあらわすものである。信条と信仰告白は、それがキリスト者の経験に基づいた真の確信を表している限りにおいてのみ、有効なものである。公式の原則が支配し、個人や集団がイエス・キリストとの生命的関係から逸脱し、その経験が曖昧にされる時、信条と信仰告白は純粋な告白であることをやめて、代りに信仰の象徴か規則になる。生命的霊的経験から公式な説明への逸脱は緩慢で、感ずることの出来ない程度であるが、その過渡期に信条と信仰告白は、初期の自由と自発性の多くを失い、だんだんと入念になり、公式化し生命がなくなる。以上のように信条と信仰告白は歴史の中で教会が聖書を受け入れ、それに基づいて告白してきた信仰の内容の体系的要約であり、その状況の中での信仰の証である。但し、全ての信条と信仰告白の声明は、聖書それ自体の代わりとして出されたものではなく、聖書に基づいたものであることをおぼえたい。

結論として信条と信仰告白が持っている四つの目的を述べよう。第一に、信条と信仰告白は、真理に対する生きている証をするということである。第二に、信条と信仰告白は、誤謬に反対の証言をするのである。第三に、信条と信仰告白は、同じ信仰の仲間の一一致のきずなを与えるのである。第四に、信条と信仰告白は、信仰に一致している者の継承を促進し、信仰者とその子孫を教える手段を提供するのである。

（2） 信仰基準

信条と信仰告白については概要を見て来たわけだが、信仰基準とは何であるのか。信条や信仰告白とどのような関わりを持っているのか、又信仰基準の目的は何かということについて次に述べよう。

信仰基準という言葉は何を意味しているのだろうか。これは初歩的な質問であるが、重要であると思われる。この理解によって、その内容が吟味されなければならないからである。

「信仰規準」は、キリスト教大辞典によると、使徒信条以前の救いの真理に関する教えの規準となるものを簡単に信条の形にあらわしたものである。それは、古ローマ信条と言われ後の使徒信条の母体となったものではないかと言われる。アクイレアの司祭ルフィヌスは、その「信条講解」（400年頃）の中で、エルサレムで使徒たちが作った信仰基準として彼が信じ、ローマの教会で

は、バプテスマの際の信条として使われていたローマの信条と、アクイアの信条とを比較している（H・ベッテソン編 キリスト教文書資料集 p.51）。『これは最初使徒より口伝されたと信ぜられ、のち文書となったと言われる。これは真理基準とも称される。コリントのディオニュシオス、イレナエウス、アレクサンドリアのクレメンス、ヒッポリュトス、テルトゥリアヌス、ノヴァティアヌスのうちに言及されている。この「信仰規準」の正確な内容については近代学者の間に異論があるが、おそらく基本的なバプテスマ信条を指すものと多数の学者は考えている。バプテスマを受けるために知らねばならない規準的教理を箇条的にまとめたものと見られる。イエス・キリストについて、天父について、聖霊についての部分にわかれ、ここから三位一体的な古代のローマ信条、そして使徒信条が形成された』（キリスト教大辞典 p.65）。K G Kの信仰基準は以上述べたものと同一視できない。なお、Regula fideiを「信仰規準」ではなく「信仰基準」と訳すことも可能である（ハイック）。バプテスマを受けるために知らねばならぬ規準的教理の要約としての信仰規準は、それなりに一つの目的を持ったもので、それはそれなりに完結した性格をもっている。我々が追求している信仰基準も一つの運動と交わりの性格づけをするという目的をもったものでそれなりに完結した性格をもつものといえよう。

次に信仰基準と信条、信仰告白との関係を考えてみよう。信仰基準は「信条」(Symbolum, Creed)や「信仰告白」(Confession)とも同一ではない。既に述べたが、信条と信仰告白とは本質的差異がないと考えてよいと思われる。信条や信仰告白はそれぞれ歴史的制約をもっているが、それなりに信仰についての必要かつ、十分条件を記しているように思われる。それに反して信仰基準は信条と信仰告白という信仰の戦いの歴史的遺産の上に立っていて、その伝統を受け継いでいるものであるが、その成立の過程は少し異なっている。つまり、一つのキリスト教の運動にかかわる者たちが、既に、伝統と信条・信仰告白と教派的特色を有しているそれぞれの教会の会員であるという前提がある。教派的特色という多様性の中の共通要素、コンセンサスという点にその出発点があるのである。それで、運動の出発点や精神的基礎は必ずしも信条や信仰告白のようなものとは性格が異なるものとなるのではないか。多様性の共通分母的性格が強いのである。このように信仰基準は、信条や信仰告白のように完成されたものではないが、何らかの形にととのえられた、歴史的状況のもとにあるキリスト教の運動や会の構成員の確信の表現・表明であり精神的霊的一致の根拠となりうるものと言うことができるのではなからうか。なお、先の Rule of faith は今日のプロテスタント教会では聖書そのものを示し、それが信仰基準第一項の唯一の規範という語に訳されている。このように考えてくれば、K G Kの信仰基準は、英語（あるいは、ラテン語）に言いかえると（ハンス・ビュルキ氏のいう）Doctrinal Basis という言葉に近いものではないかと思われる。（Essentials By Dr.Hans Burki, I F E S参照）

信仰基準の大きさと範囲はどの程度のものであるか。信仰や聖書の内容について体系的に出来るだけもらさず記述しようとするなら、一つの組織神学の本となってしまうだろう。しかし、ある程度まで必要十分な告白をなそうとするなら「ウェストミンスター信仰告白」の程度にはなろう。K G Kの信仰基準は一つの教団の信仰告白のような性格のものであろう。

信仰基準は、公式なあるいは教会的な意味で信条や信仰告白として認められないものであって、信仰基準の採用は、キリスト者の兄弟はどこまでかという限界を権威をもって定めるということではなくて、運動や交わりの中に加わろうと願っている一群の人々を示すものにすぎないということをおぼえるべきである。信仰基準の中のある信条や教義の選択は、他の信条や教義を除く結果になるが、選んだものだけが重要な真理の全体を構成するということでも、又、除いたものが大して重要でないという意味でもないのである。

結論として信仰基準の目的を見ることにしよう。第一に、信仰基準は、本質的で削減できない聖書の教理の表明の要約を集めたものである。第二に、信仰基準の存在は聖書の啓示の神的真理を聖霊の力による教えによって、もろい人間のことばによって伝えることができること、又同じ聖霊の照明によって救いと聖化のためにそれを知り、受けることができるという確信を表明するものである。第三に、信仰基準はひとたび与えられたキリスト教信仰の本質に注目させる。その本質は常に研究され、説明され、新しく適用される必要がある。第四に、信仰基準は同信の仲間的一致のきずなを与え、運動や会の継承を推進し、後継者教育の手段を提供する。

3、K G Kの信仰基準—その必要性

(1) 超教派運動における信仰基準の必要性

いかなる運動体にあっても、その運動を規定する色づけなり綱要というものがある。何だかわからないけれども人が集まっているからといって運動は長続きするものではない。人々は運動体の目的と性格に賛同することによって、その運動体の一員になると考えてよいように思う。

キリスト教の超教派運動は、神の摂理のうちに、キリスト者の間と、教会・教派間の伝道・宣教の協力の必要から、又諸教会の社会、国家、世界との係わりにおける協力の必要から色々な形をとって現れてきた。それぞれの超教派運動の創始者達は、自分たちに与えられたヴィジョンを実現するために、運動の目標と性格づくりに取り組んでいる。超教派運動の性格作りの基本要素として信仰基準はどうしても必要になってくる。初代教会史の「超教派」(公同教会)運動の中で生まれた使徒信条は、団体としての教会の普遍的性質を強調し、救いをキリストと結びつけてから、信者の復活とその永遠の生命とを中心とする明確な終末観(目標)をもっている。多くの教会は今でも、使徒信条はキリスト教の主要な要点を都合よくまとめたものとして便利としているのである。信仰基準は使徒信条のように、超教派運動の試金石であり、アイデンティティ(自己証明)であり、運動の旗じるしの役割をする。超教派運動にとっての信仰基準の内容は運動の構成員を選択区分する基本となるわけである。信仰基準があることは、キリスト者にとってどの超教派の運動に参加し、寄与すべきかどうかの決め手の一つとなる。

既に述べたように超教派運動は各種伝道団体や宣教団体にみられるが、そこに扱われる信仰基準は各教会の持っている信仰告白や信条の公分母的なものである。幅広い枠組みの中で超教派運

動は進んでいくのであるが、超教派運動といえども現代日本の教会が直面している諸問題を避けて通るわけにはいかない。その諸問題とは、異教・異端・自由主義神学・無神論などである。超教派運動の信仰基準を考える時、各教会・教団の「信仰告白」と異なってくるのが当然出てくる。その時、ある意味で福音的教団・教会の最大公約数、共通点を告白することになる。また、超教派運動は教会ではないという立場をとるなら、聖礼典の言及も不要となる。また、超教派における「信仰基準」は、積極的な信仰の表明と共に、福音的でないグループに対する弁護、あるいは差異を明確にすることがひとつの重要な役割であるように思われる。

(2) K G Kにおける信仰基準の意義

① K G Kの性格

K G Kは戦後間もなく、数人の学生の例日祈祷会を基礎として、自然発生的に生まれた運動である。当時全国的なキリスト教学生運動としては学生YMCA（学Y）が活動していた。K G Kはからし種の如き小さな群れであったが、長い歴史と組織をもつ学Yの対峙するものとして最初の性格形成をなした。学Yに対峙するK G Kの性格はどんなものなのか当時のK G Kの主張を機関紙『キリスト者』1952年7月号から引用しよう。

健全な学生運動の発育のためには、日本における特異性と世界的な普遍性を持たなければならない。キリスト者学生会は戦後日本の学園の中で『キリストを知り、キリストを知らせるために』その働きを始めてからこのヴィジョンを持ち続けて来た。その世界的な範としては—インター・ヴァーシティ・フェローシップ（I V F）から学ぼうとしている—キリスト者学生会の内外共通の特異性は純然たる歴史的聖書信仰にある。理解を助けるために主義という言葉をもって現わせば、聖書主義、福音主義、超自然主義とも言えよう。聖書主義とは、最近の聖書論でよく言われる『聖書は神の言を含む』とか『聖書の言が体験として神の言になる』とかいう意味でなく、『聖書の言そのものが、神の言の啓示である』という信仰である。従って聖書のみが信仰と実践の最高の権威である。福音主義とは、義認と聖化の教理を受け、それに信仰に基づいた体験と生活のあることを信じることである。超自然主義とはナチュラルスティックな高等批評説に反し、超自然的な父なる神と御子キリストが歴史という現象の世界に事実、超自然的な奇跡を行い給い、今もなお日本の学生の心の中に革命ならざる新生、聖化の超自然的奇跡を行い給うことを信じ期待することである。

このようにK G Kは、創立期からその信仰的立場に関して、はっきりと自己規定を持つ運動であったことがわかる。K G Kのもう一つの性格として、K G Kは学生の手によって学内伝道のために作られた運動であるという一面をもっている。本来伝道は教会に委ねられた使命であるが、K G Kは大学という特殊社会環境に遣わされた超教派の運動であり、教会の枝と見ることが出来

る。発足の当初から福音的な諸教会の支持と祈りに支えられて来たが、実際、K G Kの信仰的立場自体も、K G Kが自ら築き上げたというより、日本の福音主義諸教会によって与えられた面もある。

次にK G Kの超教派性について考えよう。教派を別にしている教会間の協力関係を意味するものとしてK G Kが超教派であるということは何よりも、学生キリスト者が大学という場に、それぞれの教会の一員としてイエス・キリストによって遣わされていることから自ずと出て来ることである。各自が属している歴史的な存在としての教会は公同の教会の現実である。同じ大学に学ぶキリスト者をたとえ所属教派、教会は異なっても、ただイエス・キリストのゆえに同じ神の民の一員として受け入れられるところにK G Kの交わりは生れる。さらに教会に委ねられている使命、即ち、イエス・キリストが主であると告白することは教会堂の中だけでなく、教会を構成する各々の遣わされた場で、生活全体をかけてなされるものであり、それがその教会の告白であり証しであるということである。

② K G Kにおける信仰基準の意義

K G Kにとって信仰基準はどのような意味を持つのであろうか。K G Kの信仰基準は、K G Kの基本的性格である福音主義に立つ信仰の短い声明である。これは、宗教改革によって生まれた福音主義諸教会がそのおかれた歴史的な状況で、その存在をかけて表わした時代状況に固有な告白としての信条や信仰告白と同類のものでもなく、それにとって代わるものでもない。また、それらの信条や信仰告白の基いとも言うべき基本信条（公同信条）でもない。この信仰基準はK G Kが福音主義的超教派運動であるという時、「福音主義的」とは、少なくともどのような信仰の内容を告白するかを表したものである。つまり、基本的にこの基準と一致するところの信仰告白をもつ福音主義的な諸教会の運動として自らを規定したものである。また、K G Kが、構成員各自の信仰的立場を問わないという意味での超教派運動ではないことも意味している。K G Kの運動を担うキリスト者が自らの信仰と信仰的立場を吟味するものさしとしての意義をもっているのである。

K G K運動に参加した者たちは、自分たちが置かれている状況は真空地帯ではないことに気づかされる。それでK G Kの信仰基準は超教派的性格をもつものとして、現代における状況のもとで、ある程度、区別すべき教えを考慮した告白であることに意義がある。K G Kの信仰基準は救いについての最小限度の告白と、また現代の思想に対して、福音主義の何であるかを示すものであることが最大の役割となるのである。現代の支配的な思潮の一つは実存主義あるいは主観的傾向である。巷には多種多様な「イエス・キリスト」、「福音」、「救い」が入り乱れている。相対主義が「ことば」に対する不信という一般的状況を作り出し、個々の状況の一般化が行われている。自然主義、ヒューマニズムなどに見られる、人間中心の価値判断が支配的な原理となっている。このような中でどのような原理に基づき、キリスト者学生会に属する者は自らの信仰の確立、献身を目ざし、信仰の徹底を目ざそうとするのであろうか。また、我々が何に基づき、何を宣べ伝

えようとしているのか。これらの基本的なことを明確に確認しないならば、学内、大学間の協力は成り立たなくなる。K G Kが特定の目的に向う信仰運動体であろうとするならば、当然その目的を規定する、あるいは基礎づける信仰的立場が要求されてくる。信仰基準はこれらの実際的な必要に応ずるものである。

もう一つの信仰基準の実際的な必要は、K G Kの構成員が短い期間に必ず入れ替わるということに由来する。構成員が変わっても、K G Kが単に組織体として存続することだけでなく、信仰の運動体として継続、成長してゆくにはその信仰の純粋性の保持が必要になる。S C M (Student Christian Movement) の変質からイギリスのI V Fが生まれ、また国際福音主義学生連盟 (I F E S) が結成されていったが、厳しい経験からキリスト教学生運動は信仰基準の必要を学んだのである。

4、統一信仰基準成立のいきさつ

(1) K G Kの信仰基準の成立

K G Kの信仰基準はどのような歴史をたどって形づくられたのか、又、統一信仰基準はどのように成立したのかを眺めることにする。

① 1948～51年 主に関東地区の信仰基準の形成のはじめ

K G Kは前述のごとく、組織よりは、人格的、個人的努力に重きをおいて、生ける教会の枝として活動していた。しかし、次第に次の事実に目覚めた。学生は四年間の生活を終えると、学窓を去り、大学は新人を迎えて、絶えず変貌を遂げてゆく。学内で、K G K運動の理想的な活動を維持するのは容易なことではない。1948年から1951年にかけてK G Kはすでにこの問題に直面したのである。この流動的な未組織状態の時期に、K G Kの重要な方針の決定執行するものはスタンディング・コミッティー「起立委員会」であった。しかし、実はこの起立委員会も「信仰基準」の具現的なものでしかなかった。信仰基準が与えるヴィジョンこそ、起立委員会の原動力であった。起立委員会を生かすこと、これだけが起立委員会の目的であった。実に、K G Kは信仰基準と共に生れ、それと共に育ったといえよう。最初の信仰基準は「イエス・キリストを私たちの救い主、また主として信じる」ということだけであった。これは確かに最も根本的なことであつたに違いない。しかし、それと共にK G Kは五項目よりなる別の基準も持った。戦後の自由主義神学の影響が強かった時代に生きた学生にとって、これは大きな力となった。この信仰基準のためにK G K学生は非難された。しかし、聖書は「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが救いにあずかるわたしたちには、神の力である。」と言う。信仰基準はこの十字架の言葉を結晶させたものとして、初期のK G K学生たちの力の源泉であり、確信のよりどころとなった(以上は、週刊キリスト者1966年3月号特集号、『精神的伝統』の要約である)。

② 1952年～56年

この時期は、信仰基準はそのままの形を受け継いだ。1952年にK G Kの教理基準が機関紙「キリスト者」(1952年特集号)に出されている。項目は全部で九つある。(1)三位一体、(2)聖書の靈感と權威、(3)創造、(4)人類の墮落、(5)受肉せる神の御子、(6)贖罪、(7)聖霊、(8)教会、(9)再臨、そして最後に、[この教理規準は暫定的なもので、なお検討中である。]との但し書きがついている。これはその後途絶えてしまった。

そして1956年にはキリスト者学生会の大綱が作られ、目的、性格、信仰基準などが定められ I F E S に加盟した。

③ 1962年5月26日、関西地区K G Kの規約は五項目より成る信仰基準を採用した。

本会は以下の如き信仰基準を有する。

- 1、 旧新約聖書六十六巻は、神の靈感によって記された神の言葉であり、原典に於いて絶対完全、無謬、かつ絶対權威あるもので、我らの信仰と行為の唯一の基準である。
- 2、 唯一真の神は、父、子、聖霊の三位にして一体であり、全能なる主権者かつ、創造主である。
- 3、 我らの主、イエス・キリストはまことの神であり、又、全き人でありたもう。その処女降誕、贖罪の死、肉体の復活、父なる神の右に座し、再び栄光の中に来たり、全ての人を審きたもう事、神の国を完成したもうことを信ず。
- 4、 聖霊は罪人を新生させ、神の性質に増々似させ、救いを全うしたもう。
- 5、 救いは信仰のみによって受ける恩寵であり、贖われたものは一体である。

④ 1963～64年

この時期にK G Kの信仰基準は改訂された。その内容は学内グループ・モデル規約となつてあらわれた。それは次のようなものである。

信仰基準

- 1、 本会は初代教会の公同信条と、宗教改革運動により誕生した福音主義教会の信条と信仰告白において説明された歴史的キリスト教信仰をその立場とする。
 - 2、 ただし、過去一世紀半に、伝統的語法を採りながら、それを私的に解釈することにより、本来の字義や聖書的意味を無にする傾向があるので、本会は信仰の根本に関係するある点については、主観主義的な解釈や、むやみな異論に対して聖書の啓示の客観的内容を明確に定義しなす必要があることを信じ、次の教理基準を設ける。
- 一、 旧新約聖書は、神の選ばれた筆記者たちが、神の靈感のもとにするしたもので誤謬を

含まず、信仰と生活のすべての問題に関する唯一の基準である。

- 二、 父と子と聖霊とは、三位一体なる唯一の神で、創造と啓示と救いと最後の審判の主権者である。
- 三、 人間は墮落以来、罪のなかにおり、ただ処女より生まれ、人間の代表また身代わりとして贖罪の死を遂げ、肉体をもって死より復活されたまことの神にしてまっつき人なる私たちの主イエス・キリストのみわざによってのみ、罪から救われる。
- 四、 聖霊は、罪人を新生させ、神の性質にかたどらしめ、救いを完成させられる。
- 五、 救いは信仰のみによって受ける神の恵みであり、すべて救われた者は一体である。

本会は、本会の役員と本会が主催する諸集会の講師はその責任を受諾する前にこの基準に衷心より賛同する意味において、本基準に署名する義務を負うものと定める。

これからわかることは、1948～51年の五項目よりなる信仰基準を単に現代における神学的論争のなかで、K G Kが取るべき立場を、従来も述べてきたように「歴史的キリスト教」にあることを鮮明にし、かつ、それを各個教派との関係で、具体的に表現したという特徴をこの改訂された信仰基準は持った。

- ⑤ 1968年8月30日成立の東北地区K G K規約は1963、64年に改訂された信仰基準をそのまま採用した。
- ⑥ 1973年6月16日に改定された関東地区K G K規約の信仰基準は、関西地区のものと原型は同じであるが、用語がいくつか違っている。

本会の信仰基準は次のとおりである。

- 1、旧新約聖書六十六巻は神の靈感によって記された神の言であり、原典において絶対完全、無謬かつ絶対権威あるもので、われらの信仰と行為の唯一の規範である。
- 2、唯一のまことの神は、父、子、聖霊の三位にして一体であり、全能者なる主権者かつ創造主である。
- 3、われらの主イエス・キリストはまことの神であり、また全き人でありたもう。その処女降誕、贖罪の死、肉体の復活、父なる神の右に座し、再び栄光のうちに来り、すべての人を裁き、神の国を完成したもう。
- 4、聖霊は罪人を新生させ、神の性質にいよいよ似らしめ、救いをまっとうしたもう。
- 5、救いは信仰のみによって受ける恩寵であり、贖われた者は一体である。

(2) 信仰基準の統一化へ向って

東北、関東、関西の三地区とも、自分たちの大学間の交わりとしての地区を組織化する際、信仰基準を設けたのである。その際、上述のような歴史的な事情のもとに、基本的には内容は同じであっても相異なる信仰基準が生れたのである。

信仰基準の統一化の動きは1973年3月の全国集会の後から始まった。地区をこえた全国的な交わりに対する関心、意識が増し、また、中央委員会（現在の全国協議委員会）でも、まだ地区組織のできていない（地区活動はしている）地区の参加の可能性も考えるようになった。全国的な交わりの機関としての中央委員会の性格づけ、具体的な活動の「週刊キリスト者」の編集委員会の位置づけを明確にしてゆく必要がおこった。K G Kは、各地区に分かれて活動しているが、全国的な運動である故に、上の必要に加えて、信仰基準の統一をした方がよいと話しあわれた。1973年4月の中央委員会でこのような話し合いがなされ、同年9月の中央委員会は、統一信仰基準草案作成の作業も理事会に依頼することにしたのである。

1974年5月の理事会は、中央委員会の要請に基づいて統一信仰基準草案作成小委員会を設けた。小委員会の構成は、理事1人、卒業生2人、学生1人（中央委員）、主事1人の5人で理事の島田福安師が座長をつとめることになった。

統一信仰基準草案作成小委員会は東北地区信仰基準をもとにして2回にわたり検討し、各理事の意見を求めた上でさらに1回検討し、1975年3月の理事会に「草案」を提出したのである。それによって検討の結果、変更された箇所は、(1) 第二項「真の神」を「まことの神」に変え、(2) 第五項「罪人は聖霊によって新生し」を「罪人は聖霊によって新生させられ」に変えた二箇所である。なお、検討の際のコメントとして次の二点をあげられた。(1) 文語的表現（三位にして一体、父なる神、贖罪のみわざによってのみ、信仰のみ、処女より、死より）があるが、文章を簡潔にするか、一般に慣用的用語として用いられるものであるので、このままで大きな問題はないと考える。(2) 形式の問題として、第二項が神について、第三項がイエス・キリストについてであり、第四項は人間の状態と救いについてであり、第五項の聖霊は主語となっていない。（注、聖霊を主語にして「聖霊は罪人を新生させ、きよくし、救いを完成する」としてもよいと思われる。）ということで多少問題があるが、救済論的順序を見ればさしつかえないことであろう。

理事会では、ことばづかいの検討、削除された東北地区信仰基準の前文(2)の内容を、解説書を出す際に入れること、欠席理事の承認の付帯事項をつけてこの案を承認したのである。そして、1975年9月の理事会において、統一信仰基準草案として承認されたのである。

5、統一信仰基準の基本的性格

(1) 信仰基準の基本的立場はK G K運動における精神的伝統の確認ということである。ある一つの運動について知ろうと思えば、人は普通、規約に注目する。K G Kの規約もその意味において、K G Kを知る上で、最も手頃である。全体を見て、まず印象づけられるのは、これが伝

道のための運動であるということであるが、これと共に、K G Kの規約は、この運動の継続性、即ち、その純粋性維持に、特に留意しているのがわかる。K G K規約において注目するに値するものが一つある。それは、信仰基準である。K G Kの存在理由は、ほとんどこの信仰基準にもり込まれているといっても決して過言ではないだろう。これは、歴史におけるK G Kの生成発展、紆余曲折をつらぬく、一個の指導理念、または根本原理といったものの集約されたものだからである。

(2) K G K信仰基準は超教派的性格を持っている。

信仰基準は信仰告白とは異なるものである。信仰告白は、それぞれの教会、それぞれの教派が歴史の中で、戦い、形成してきた信仰の告白である。しかし、K G Kの信仰基準は、K G Kが福音主義的超教派運動であるという時に、「福音主義的」とは何かを記したもので、基本的にこの基準と一致するところの信仰告白をもつ福音主義的な諸教会の運動として自らを規定したものである。我々は、こういう基準を明確にし、その上で協力することこそ、お互いの益であると確信するのである。

(3) この信仰基準は、現代の神学的流れが、特に福音的キリスト者をイエス・キリストと聖書を通しての神の権威ある啓示への確信と確固たる立場から一掃してしまおうとしている時、錨としての役目を持っているのである。現代の神学的混乱の中で歴史的福音主義キリスト教という広い立場から、今日我々が問題にしなければならない点をあげて、学生としてそれらの点に深く留意し、そのことを通して学生としての信仰把握をまったからしめたいという願いから信仰基準は設けられたのである。

(4) 信仰基準の内容は聖書について、三位一体の神について、主イエス・キリストの人格と御業について、聖霊の働きについて、信仰による救いと、信者はすべて主のみからだなる教会に属し、一体であることが記されている。信仰基準の各項目は次のように分類されよう。第一項は聖書論、第二項は神論、第三項はキリスト論（及び終末論）、第四項は人間論及び救済論、第五項は聖霊論、第六項は教会論である。各項目を通して流れている一本の線は救済論であり、この点がこの信仰基準の特色となっている。又、各項目について歴史的福音主義キリスト教の信仰の内容と他の考え方に立つ立場のそれとの対比が明確になされており、各項目の解説は、弁証論的、教理史的な視点からの論述がもくろまれている。

(5) 最後に、このように信仰基準を明確に記しているのは、K G Kの立場が変わらないためである。K G Kがこの信仰基準の内容を、根本的に否定するならば、既にそれはK G Kではなくなるし、その存在意味は失われるのである。キリスト者の側で、信仰基準が単なる「お題目」や「看板」や lip-service（口先だけの信奉）になる危険はいつでもある。それ故、教会の偉大

な信条や信仰告白のように、この信仰基準の声明文が熱心に研究され、解釈され、生活と経験に適用される時だけ、信仰基準は有意義なものとなり、ダイナミックなものとなるのではなかろうか。

以上を総括すると、我々はK G Kが学生の伝道活動であること、それが生きた教会の枝としての運動であることと並んで、それが、各教会教団の立場からしっかりと見守られ、指導され、しかも、学生がそれに応えて、責任ある伝道をしようとしているものであることがわかる。なお、この解説は、以下諸点にわたって説明を試みるものだが、細かな点までこうでなければならないことを教えるものではない。詳細な点はやはり各自が教会において教えられ、信仰的に養われるべきだと考える。ただ、一般的な意味において福音的キリスト教の基本的な事柄と確信を、今日問題となっていることとの関連においてのべて、この解説書の使命を果たしたいと願っている。

あなたの先祖が立てた昔からの地境を移してはならない。

箴言 22 章 28 節

聖徒にひとたび伝えられた信仰のために戦うよう、あなたがたに勧める手紙を書く必要が生じました。

ユダの手紙 3 節

あなたがたは霊を一つにしてしっかりと立ち、心を一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており、また、どんなことがあっても、反対者たちに驚かされることはない。

ピリピ人への手紙 1 章 27、28 節

II 解説

1、 聖句の引照

1 新旧約聖書 66巻^①は、神の選ばれた聖書記者たちによって神の靈感^②のもとにしるされた神の^③ことば^④であって、原典において誤謬を含まず、信仰と生活の唯一の規範^⑤である。

① 黙 22:18, 19 申 4:2 12:32 ガラ 1:8, 9

② ヘブ 1:8, 9 民 12:8 ルカ 1:1-4 I コリ 14:37 II ペテ 3:2

③ II テモ 3:16 II ペテ 1:20, 21

④ I テサ 2:13 マタ 5:18

⑤ 詩 119:105 ヨハ 5:39 使 18:28 ロマ 10:17 15:4 II テモ 3:15-16 ヘブ 4:12
マタ 22:29

2 唯一のまことの神^①は、父、子、聖霊の三位にして一体^②であり、全能の主権者^③、創造主^④である。

① 出 20:3 申 4:35, 39 6:4 I 王 8:60 イザ 45:5 ヨハ 17:3 I コリ 8:4-6 I テモ 2:5
I テサ 1:9

② マタ 3:16, 17 28:19 II コリ 13:13

③ 創 17:1 ヨブ 42:2 ルカ 1:37

④ ダニ 4:34 詩 47:8 ロマ 8:28 ヘブ 1:13 黙 4:8

⑤ 創 1 ネヘ 9:6 コロ 1:16 ヘブ 11:3 黙 4:11

3 わたしたちの主イエス・キリストは、まことの神^①であり、まことの人^②である。主イエス・キリストは、処女より生まれ、罪人の身代わりとして贖罪の死をとげ、肉体をもって死より復活し、父なる神の右に座し^③、再び栄光のうちに来臨し^④、すべての人を裁き^⑤、神の国を完成する^⑥。

① ヨハ 10:30 コロ 1:15-18 ピリ 2:6, 7 I ヨハ 5:20

② マタ 4:2 8:24 26:38 ルカ 2:40, 52 22:44 23:46 ヨハ 11:33, 35 4:6 ロマ 5:15
ガラ 4:4 I テモ 3:16 ヘブ 2:14 I ヨハ 4:2

③ マタ 1:18-25 ルカ 1:27-38

④ イザ 53:4, 5 ヨブ 19:25 マタ 20:28 I コリ 1:30 6:20 3:13 4:45 エペ 1:7
テト 2:14 I ペテ 1:18, 19

⑤ ルカ 24:39-43 ヨハ 20:27 I コリ 15:4, 20 ロマ 1:4 4:25 8:34 使 17:31

⑥ マコ 16:19 使 7:55 ロマ 8:34 エペ 1:20 ヘブ 1:3 8:1 10:12 12:2

⑦ マタ 20:30 使 1:11 ピリ 3:20 I テサ 1:10 4:16 II テサ 1:7 テト 2:13 黙 1:7

⑧ マタ 25:31-46 ヨハ 5:22, 27 ロマ 2:16 II コリ 5:10 II テサ 1:8, 9 ユダ 14, 15

⑨ I コリ 15:24

4 人間は墮落^①以来、みな罪のなかに^②おり、わたしたちの主イエス・キリストの贖罪のみわざによつてのみ罪から救^③われる。

① 創 3:1-19 ロマ 5:12 II コリ 11:3

② ロマ 3:9, 23 15:22 ガラ 3:22 エペ 2:1-3 テト 1:15 詩 51:5

③ 前項④参照

5 救いは信仰によつてのみ^①受ける神の恵み^②である。罪人は聖霊によつて新生させられ、きよく^③され、その救いを完成^④される。

① 使 16:30, 31 ガラ 2:16 エペ 2:8, 9 I テモ 1:15 II テモ 1:9 ヘブ 11:1

② 出 33:19 ネへ 9:17 ヨハ 1:14 ロマ 5:15, 17, 20 エペ 2:8 ヘブ 2:9

③ ヨハ 5:5-8 テト 3:5, 6 ヤコ 1:18 ヨハ 17:17, 19 ロマ 15:16 I コリ 1:30 6:11
エペ 5:26 I テサ 5:23 II テサ 2:13 ヘブ 2:11 10:10, 14 13:12

④ II コリ 3:18

6 すべて救われた者は、キリストの体である教会^①に属し、一体^②である。

① ロマ 12:5, 6 I コリ 12:27 エペ 1:23 4:12 コロ 1:18, 24

② エペ 2:19, 20 I コリ 1:2 10:17 12:12

2、 序文解説

この信仰基準の冒頭にある序文は、それに続く各項の内容を方向づけ、位置づける役割をもっている。すなわち、各項の教理内容を、その歴史背景によってさらに明らかにするのである。

神のことばとしての聖書は、神の民である教会を形成し、そしてまた教会は聖書を受け入れ、それに基づいて、信仰の応答としての信仰告白がなされてきた。いつの時代にあっても、聖書から真剣に聞こうとするキリスト者によって聖書研究が積み重ねられ、それぞれの時代の思想と闘い、弁証がなされていったのである。このようなキリスト教信仰の歴史性を、私たちが正しく理解することは必要である。教会の長い歴史の中で、信条や信仰告白として、聖書の示す福音の内容の積極的要約と誤った教えから守るために告白されてきたのである。

このような教会の遺産としての信条・信仰告白は、主にふたつの時代に集中して表されていった。すなわち 4・5 世紀までの初代教会の公同信条（あるいは基本信条）と 16 世紀の宗教改革以後に、その信仰の戦いの中で生まれ告白されていった福音主義教会の信条・信仰告白である。

初代教会の公同信条は、全キリスト教会の霊的共有財産とも言うべきもので、普遍的・基本的なものである。「使徒信条」(2 世紀) 「ニケヤ信条」(385) 「カルケドン信条」(451) 「アタナ

シオス信条」(5～6世紀)の4つがこれにあたる。これらの信条は、キリスト教信仰の基本的教理の形成期である、「神学論争時代」に生まれていった。

「使徒信条」は、今日も教会の礼拝において、信仰告白として唱えることが多い。「ニケヤ信条」は、アタナシオスとアリウスの論争と知られているが、イエス・キリストが神と同質(ホモ・ウーシオス)であることを確認する。「カルケドン信条」では、イエス・キリストが、神性と人性を持たれた一人格であることが確認される。そして、「アタナシオス信条」において、三位一体の教理が明確に告白されている。このように、公同信条は、イエス・キリストがどのようなお方であるのかということが軸となって形成されていったといえよう。

他方、宗教改革時代には、ローマ・カトリック教会との真剣な信仰の戦いを通して、多くの信条・信仰告白が生まれていった。ルター派では「アウグスブルグ信仰告白」(1530)「和協信条」(1577)、改革派では「スイス信条」(1536)「ハイデルベルグ信仰問答」(1563)「ウェストミンスター信仰告白」(1646)などである。他の教派も、これらの信条・信仰告白を基にして、各々信条等を形成していった。

これらの福音主義教会の信条・信仰告白の大きな特徴は、宗教改革で確認された「聖書のみ・信仰のみ」という聖書の権威と信仰義認の二点である。

このような歴史的キリスト教の立場から、このK G K信仰基準を理解することは大切である。すなわち、この信仰基準が、公同信条あるいは宗教改革時代に形成された福音的教会の信条、信仰告白にとって代わるものではないことが知ることができる。また、この信仰基準にプロテスタントのすべての教理が盛られていないことも知るのである。しかし、もし今日、キリストの神性を減じるような教えが出てきたとしても、あるいは信仰義認を否定する教えが出てきたとしても、このK G K信仰基準以前の問題として、私たちは「否」と答えることができるのである。

なお、加えて言うなら、近代に入って、合理主義の影響によって生まれた「自由主義神学」また今世紀になって実存主義の影響を受けた「弁証法神学」があらわれてきた。前者は、人間の理性をすべての中心に据えたため、キリスト教信仰を単なる人間主義(ヒューマニズム)の教えかあるいは人間の感情の事柄に限定してしまったのである。後者は、これまで教会がその文字通りの意味で理解し告白してきた教理の用語を主観的・多層的に理解することによって、本来の意味とは異なった内容を盛り込んだのである。その結果、聖書が神のことばであることの客観性をあいまいなものにしてしまった。

このような現代の状況の中で、私たちはもう一度、公同信条と福音主義教会の信条・信仰告白の意義とその内容を学ぶ必要があるであろう。その方向づけのなかで、このK G K信仰基準の各項がより深く、また内容豊かに理解されるであろう。

3、本文解説

(1) 第一項 聖書

第一項が聖書からはじまっていることに注目したい。広義の福音主義、すなわちプロテスタント信仰の大原則のひとつは、「聖書のみ」である。ローマ・カトリック教会は「聖書と伝承」に権威を認め、さらにそれらの解釈者としての教皇を頂点とする教会が教理の基準であると主張する。このことは、「ローマ教会」が聖書に優越する危険を含んでいるのは明らかである。これに対して福音主義教会は、神の言である聖書のみがすべての教理の規準であると告白する。この聖書観こそ福音主義を他のものと区別する重要なものである。

また、聖書が第一に述べられている理由として、「啓示」が考えられる。人は、神の被造物である自然や人間、あるいは歴史を通して神の存在を認めることはできる。(一般啓示)しかしながら、それのみによって、神の御性質や救いの計画などについて、はっきりと知ることはできない。それで、神は書かれたことばである聖書を通して、御自身を啓示されている。(特別啓示)そして、またこの聖書によって、神について、人間・自然について正しく知ることができるのである。

このようなわけで、聖書についての告白が明確にされることは重要である。

① 聖書の内容

神のことばである聖書の内容(範囲)は、旧約39巻、新約27巻、あわせて66巻である。これが、キリスト教の正典である。これに付け加えること、あるいは減らしたりすることは決して許されない。しかも聖書の各巻はばらばらではなく、全体的統一性のなかで読まれなくてはならない。

参考 外典について

最近、「外典」(アポクリファ)や「偽典」の邦訳・出版がなされ、私たちの目にふれることが多くなっている。しかし、正典としての聖書と、それらとは明確に区別されなければならない。また、異端の多くは、聖書の外に神の啓示の書と称するものをもっている。しかし、それによって彼らが福音主義と何の関係もないことを自ら証明しているのである。

② 神のことばとしての聖書

さて、聖書は神のことばであると、なぜ言いうるのであろうか。長い歴史を通して、しかも多くの人々によって書かれてきた聖書は、単なる人間の古文書にすぎないのではないかという疑問があるだろう。しかしながら、聖書が神のことばであるということは、聖書の自己証言なのである。聖書は「神の靈感のもとに書かれた」のであって、聖書の究極的な意味での著者は、神御自身である、というのが聖書の主張である。神のことばとしての聖書はそれゆえ、「書かれた文字」と同時に、それを語っておられるお方が存在することを認めなければならない。これが、聖書は単なる歴史的古文書ではないと告白する理由である。

なお、この「靈感」に関して、いくつかの解釈がある<参考を参照のこと>。しかし、一般に靈感とは「聖書記者たちが、聖書を書く際に、聖霊は彼らに働いて、用いたことばにいたるまで導きを与え、誤りをおかさないように守られた力である」と理解されてよい。このことは聖書記者が、

資料を用いたり編集したりすることは排除しない。加えて言うなら、この靈感は、原典においてのみ言えることである。(原典は、今日失われているが、「本文批評学」の成果によって私たちは、ほとんど真正な原典と同じであるといえる聖書を手にしている。)そして、聖書の無謬性はその究極の著者である神が真理かつ真実な方、全知全能の方であるという信仰に第一の根拠をもっている。そこからキリスト教弁証論にみられるような具体的な論証・証明がなされていくのである。

参考 靈感について

「口授説」(dictation)は神の語られることを聖書記者がただ単に機械的に筆記していったにすぎないとする説である。しかし、このような狭い意味で理解する必要はない。この説によっては、聖書の各巻の文体の相違を十分に説明しえない。

「照明説」(illumination)は、靈感とは聖書記者の宗教的知覚、洞察力が強く明確にされることであるとする説である。この考え方は、今日の弁証法神学が「聖書は、神の**ことばになる**」という主張にも通じる。それによると、聖書はそれ自身として、客観的な神の**ことば**ではないが、それを読む人が「**靈感**」を受けるとき、「神の**ことばになる**」というのである。しかし、私たちは靈感をこのようには理解しない。聖書が書かれたときの聖霊の働きを**靈感**と呼び、聖書を読むときの聖書の働きを**照明**と呼ぶ。それゆえ、靈感と照明を混同するこの立場は、認めがたい。

③ 規範としての聖書

すでに述べたように、福音主義においては聖書のみが教理の唯一の規範(規準)である。それ以外の権威を持ち出してくることを認めない。正しい信仰は聖書によって教えられ、またそれによって信仰の生活が形成されていくのであって、その意味で「**信仰と生活**」は切り離すことはできない。聖書によって信仰と生活を形成していくこと、これは神の**ことば**としての聖書のもつ性格からくる当然の結果である。人格をもたれる神が、聖書を通して私たちに**語られる**のであるから、私たちが神に**答える**ことが当然求められるのである。このよう神への応答を無視した聖書の読み方は、神の**ことば**としての聖書の性格を認めていないことになる。

参考 「規範」(Rule of Faith)について

歴史的用法では、規範とは救いの真理に関する教会の規準となるものを簡単にあらわしたもの、すなわち信条の意味で用いられる。(派生的規範)。他方、別の用法ではキリスト教教理の典拠あるいは規準の意味で用いられる。ローマ・カトリック教会では教会の教えが、プロテスタント教会では聖書がそれに該当する。(決定的規範)。このような二重の用法を知っておくべきである。聖書のみが恒久的であって、唯一の規範(規準)である。公同信条・信仰告白は、相対的、歴史的であることを認める必要がある。

(2) 第二項 神

人間はその長い歴史の中で、「神」を求めていった。そこに多種多様な神概念と諸宗教が生まれていった。しかし人間の理性や感覚によって人間を越える存在である「神」を十分に知りつくし

えぬことは、当然である。その結果、神は知り得ないとする不可知論かあるいは人間と同じような「神」を持つかに至る。

聖書は、人間が神を求めていたのではなく、神が人間を求めて御自身が自らを人間に示されたことを語っている。神を知ることは、まず聖書を通してはじまる。

① 唯一のまことの神

唯一のまことの神が告白される時、それは「神ならぬ神々」、すなわち人間のつくりあげた偶像の神、観念の神が否定される。また当然のことながら、無神論・汎神論・多神論が否定される。ところで聖書が啓示しているのは「唯一神」であって、「単一神」ではない。単一神教 (mono latny) とは、多くの神々の中の一神を選んで、特に崇拝の対象とすることである。他方、唯一神教 (mono theism) とは、神が唯一であって、他の神々の存在を認めない。

さらに、唯一の神の告白には、神の統一性 (unity) が含まれている。神の本質は分割できないこと、すなわち、神は諸部分からなる方でもなく、またいくつかの部分にも分けることもできない方なのである。もし、この神の統一性を認めなければ、すぐに多神論に移っていくことはやさしい。

② 三位一体の神

三位一体とは、唯一の神の本質のうちに、父なる神、子なる神、聖霊なる神の三人格が永遠に存在するということである。このことは、神の統一性の関係を正しく理解しなければならない。

この教理を理解することの難しさとともに、この用語が聖書の中に見い出されないことから、この教理は単に教会が考え出したものにすぎないという攻撃を受けてきた。確かに、この教理は、4、5世紀の「神学論争時代」を経て、用語と内容が確立されていった。しかしながら、これは単なる人間の思弁から生まれたものではなく、聖書の啓示に基づくものなのである。教会は一貫して、三位一体の教理が聖書の中心的教えであることを認めてきた。そして、この教理を否定するならば、キリスト教信仰そのものの否定になることも経験してきたのである。

参考 この教理の誤った理解

三位一体の教理は次のような考え方から区別されなければならない。すなわち、「三神論」と「モナルキア主義」である。「三神論」は、神の本質の統一性を否定して、三つの独立した別個の神々を考える。他方「モナルキア主義」(独裁神論)は、唯一神を強調するあまり、三人格を否定することになった。この立場にはふたつの考え方がある。ひとつは、キリストの人間性を強調して、神の唯一性を保持しようとした。この考えによると、イエスは単なる人間にすぎなかったが、神の霊(デュナミス)を受けて神の子になったというキリスト養子説を主張した。(勢力論的モナルキア主義)。もうひとつは逆にキリストの神性を強調することによって、神の唯一性を守ろうとした。すなわち父なる神がキリストの様態をとってあらわれて、十字架につけられたと主張した。

(様態論的モナルキア主義)。

③ 全能の主権者・創造主なる神

神が全能であられることは、神が意志したことが必ず実現するということである。この全能によって、この世界と人間が造られ、神の主権の下に置かれている。

そして、この全能の神が、人格をもたれる方であることを同時に知る必要がある。このことは、キリスト教有神論と形而上学的有神論を区別するものである。哲学において神が「第一原因」とか「絶対精神」とか定義されることがある。しかし、そのような神概念ではあの「主の祈り」にあるような「われらの父よ」と神に向かって叫び祈ることはできない。

また主権者なる神の告白は神の御わざ（特に創造）がその動機と目的において、神中心であること、そして神によって創られた世界が今に至るまで神によって保持され導かれているという摂理の信仰の表明でもある。かつて合理主義の時代に「理神論」(Deism)という思想があらわれた。すなわち世界は神の被造物であるが、創造の後、もはや一切の神の介入なしに、それ自身の法則性によって動いているという考えである。このような思想は、現代世界をおおっている「实际的無神論」、つまり「たとえ神が存在していても自分にとっては何の意味もない」、という考えへの道を開くものとなる。しかしながら、神は今もなお主権者であられるという信仰の告白は、この地上の一切の権威を相対化させると同時に、キリスト者の日常生活のすべてまでも支配し導かれるという神への信頼の表明でもある。

そしてまた、私たちの神は、この天地万物を造られた方であり、この私をもつくられた方である。このことによって、一切の無神論的世界観においては、個物の意味は失われ、人間各個人の個性とその意味づけの根拠を失っている。また聖書が、「無からの創造」を語ることによって創造者と被造物の差異をもたない汎神論的世界観は否定される。聖書の創造の教理は、キリスト教世界観のひとつの重要な基点である。

(3) 第三項 イエス・キリスト

歴史的にみて、信条はイエス・キリストによる救いとその栄光についての告白から出発している。「わたしたちの主イエス・キリスト」という告白はすべての信条・信仰告白の原型である。

「ハイデルベルグ信仰告白」の中で次のような箇所がある。

『問 34 : あなたはなぜ主を、われらの主と呼ぶのですか。

答 : 主がわれらを身も魂もともに、金や銀ではなく、尊き御血潮をもって、罪から、また悪魔の一切の力から、ご自分のものとするために、救いあがなって下さったからであります。』

もう一度、この「わたしたちの主」ということばの重さを、確認したい。

① イエス・キリストの神性と人性

三位一体において、イエスが子なる神である告白がなされている。そしてこの項の「まことの神であり、まことの人である。」という告白でイエス・キリストの両性一人格が確認されている。聖書に示されているように、当時のユダヤ人にとって、十字架につけられたナザレ人イエスがまことの神であることは、つまずきであり、神への冒瀆にさえ思えたのである。また逆に、ギリシヤ哲学の影響を受けた人々にとっては神の救い主が、肉体を持ったまことの人であることを否定しようと考えた。しかし、イエス・キリストの完全な神性と人性を認めなければ、私たちの救いも不完全なものとなってしまふ。神と人間の唯一の仲保者なる主イエス・キリストは神であり、かつ人であらねばならなかった。

イエス・キリストにおけるこの両性の関係は序文の解説でも述べたように「カルケドン信条」に明記されている。「一つの同一のキリスト、御子、主、ひとり子は、二つの性において、混合することも、変化することも、分割することも、分離することもしない。」

② イエス・キリストの御業

第一に処女降誕が告白されている。今日のキリスト教会においてさえ、この聖書の箇所を単に詩的表現にすぎないとか、「神話」であって、歴史的事実性より意味こそ重要であると主張するところがある（これはキリストの復活についても同様である）。しかし、これを否定する態度は、結果として主イエス・キリストの神性と人性の否定につながっていくことになる。確かに主イエスは、人としてお生まれになったが主は被造物ではなく創造主であることを覚えなくてはならない。また主には、人間の罪の性質がなかったことを思うとき、「使徒信条」にあるように「主は聖霊においてやどり、処女マリヤより生まれ、」と告白せざるを得ない。

次に、主の死についての告白である。この信仰基準では「使徒信条」とくらべて、主の死の事実よりも、その死のもつ意味が前面に出てくる。すなわち主の十字架の死は罪人の身代わりとしての贖罪の死であった。贖罪は、人間の罪からの救いという面と、さらに、神との和解の面を含んでいる。しかもここで、「罪人の身代わりとして」ということばが明記されている。すなわち、「形罰代償説」としての贖罪理解を語る。これは、主イエス御自身の、またパウロやヘブル人への手紙の記者の主張でもある。このような確認は、中世の「道徳感化説」や近代の「模範説」等の、主の十字架の理解に対する発言でもある。

第三に、主の復活というキリスト教信仰の中心のひとつの告白がなされている。特に今日、復活の歴史性を否定的に理解する発言がしばしば聞かれている。そのような中で、「肉体をもって死から復活」されたことの告白は今一度確認される必要がある。主の復活にこそ、私たちの主イエス・キリストが神であることを保証し、神の義の証明がなされ、罪のゆるしを確認し、わたしたちの復活の希望を与えるものだからである。

参考 「肉体」という語について

この信仰基準で「肉体」と語られているが、多くの信条・信仰告白は「からだ」となっている。

しかし、ここであえて「肉体」という表現を用いたのは、主の復活後のからだを超自然的性格を有してはいても、なお可視的であり、十字架にかけられたときと同じからだであったことを主張したかったからである。「使徒信条」の「からだのよみがえり」にあたるラテン語の原文は caro すなわち「肉体」である。英語では十六世紀までは flesh がその訳として与えられていた。

第四に、主イエス・キリストの現在の姿の告白であって「父なる神の右に座し」と続いている。この右とは、父なる神の「権能の座」を意味するものである。現在、主イエス・キリストは教会の主であり、かしらであられ、教会を支配するとともに、教会のために執り成しておられるのである。

最後に未来のこと、すなわち終末について、主の御業との関連において語られている。主の初臨は、ベツレヘムの馬小屋という世界の片隅で起きたのであるが、主の再臨は全世界の人々が、はっきりと認められるものとして、しかも栄光に満ちて起きるものである。これはキリスト者にとっての希望であり、聖書が主の再臨に多くの言及をしていることを注目すべきである。そしてまた教会が、この終末意識を失う時に、その本来の姿も失ったことも記憶しなければならない。

そして主の最後の審判が語られる。主によって贖われた者は永遠の神との交わりに入れられ、失われた者は、永遠の刑罰に定められる。この厳粛な使信を、望みと畏れをもって聞く必要がある。

このようにして、主イエス・キリストは、御国を父なる神に渡されることによって、神の国は完成するのである。

(4) 第四項 罪と救い

「人間とは何か」という問いに対して、古今さまざまな定義がなされてきた。これに対して聖書は、「人間は罪人である。」と語っている。この定義に多くの人々は反撥を感じているが、しかし人間の本質を鋭く言いあてたものであることは確かである。

① 人間の墮落

まず第一に、聖書は人間について、その罪の性質を持っていることを語る。人間も神の被造物であることはすでに見たとおりである。しかも、聖書は人間がはじめ罪のないものとして造られたこと、また、「神のかたち」に似せて造られたことを語っている。すなわち、人間は、その被造物であるという点において動物などの他の被造物と同じである。しかしながら、人間は「神のかたち」をもつゆえに神と交わることができ、この点において他の被造物と明確に区別されるのである。

しかし聖書ははじめの人アダムが、神の命令にそむいたことによって罪を犯し、それによってすべての人間がこの罪の中に生きていることを語っている。罪とは第一に神に対するそむきであると言えよう。この罪によって、人は神との交わりを失い、また人と人の間の正しい交わりをも

失ってしまった。それはまた、人間が「死の存在」となったこと、神の怒りの下にあることを意味する。

【参考】 墮落と原罪について

この人間の墮落と原罪の教理は、しばしば人間性を低く考えているものであると攻撃されてきた。しかし、このことについて F・シェーファーは、彼の著書『神の沈黙？』の中で興味深いことを語っている。すなわち、人間の歴史にみられる人間の尊厳性と残虐性の二面性をどのように理解するかということについてである。

もし、人間の起源を非人格的なものからと考えると、人間の有限性は残虐性と同一とみなさざるを得なくなる。すなわち正・不正は相対なもの、あるいは単に「反社会的」であるとか「好き嫌い」にすぎなくなる。そして結局のところ、「あるがままのものが正しい」とされてしまう。人間の残虐性もそれゆえに、受け入れねばならなくなってしまう。

さて、次に人間の起源を人格的なものと考えたとどうなるだろうか。しかしこの「創造」に立つ考えもふたつに区別しなければならない。第一に、人間の墮落ということがなければ、神は人間を残虐なもの（罪ある者）として造られたと考えざるを得なくなる。すなわち、人間の本性そのものが残虐性であり、神もまたそのような存在となる。この場合、人間の残虐性（罪）が量的に変化することがあったとしても質的に変わる望みをもちえなくなる。しかしながら、第二の考え方、現在の人間の残虐性は、本来のあり方ではなく、異常なものであるとするならどうだろうか。ただこの場合でも神が人間を造り変えて異常なものとしたとするなら問題は解決しない。けれども、神によって創造された人間が、自らを変えてしまった—すなわち人間の自由意志による墮落—と理解するなら、神の正しさと同時に、人間の異常さという現実も認めることができる。そしてさらに、人間の未来の在り方に戻る希望（罪からの救い）をもつことができるのである。

② 罪からの救い

イエス・キリストの死が「罪人の身代わりとしての贖罪の死」であったことは、第三項の告白であった。そしてこの項においては、罪からの救いがイエス・キリストの贖罪のみわざのみであることに強調点がある。

これは、罪からの救いが、人間の行為・業績によるものではないこと、また他の手段・宗教などによるものではないことの確認である。このことについて、パウロは当時のユダヤ教的な律法の厳守こそ救いの手段とみなす人々に対して「ガラテヤ人への手紙」を書いて論駁する。またかの有名なアウグスチヌスは、ペラギウスとの論争において、罪からの救いは人間のわざによらないことを主張した。この流れは、福音主義の教会が受けついでいるものである。

今日、キリスト教界の中に、他宗教との「対話」を重んじるあまり福音の「宣教」が軽視されて、その結果、イエス・キリストの名のほかには救いはないという信仰が失われつつある。もう一度、贖罪のみ業によるのみという唯一性を確認すべきであろう。

そしてまた、逆に罪の解決の方法を見ることによって罪そのものの理解を知ることができるのである。日本の神道では、人間の外側につく汚れが罪であると考えるので、それを払い清めることが救いとなる。また、罪とは無知の結果であると考えたら、その解決として教育がもち出される。また貧しさの結果と考えるなら、経済的な豊かさが解決と考えられる。

聖書の光に照らされて、罪を知ることがなければ罪の重大性を認めることができず、またなぜ主イエス・キリストのみわざのみがその解決であるかを知ることができない。聖書が厳しいほどまでに人間の罪を繰り返し語るのは、その罪こそ、人間を悲惨な状況に閉じ込めるものであることと、さらに、その罪からの真の解決があることを示すためにほかならない。罪からの救いによって、再び神との交わりをもつことができるのである。

(5) 第五項 神の恵みと聖霊

主イエス・キリストの十字架の出来事は、確かに歴史上に起こったことであり、その十字架の意味は、罪の中に生きている人間を救うためである。しかしこの救いの事実が各人にとって、「わたしの事実」となるためには何が必要なのであろうか。

① 神の恵みとしての救い

前項において、救いは、ただ主の十字架のみわざによってのみであることが確認されたが、ここでは、それを受ける人間側からみるなら、救いは信仰のみであることの確認がされる。宗教改革の旗じるしは、「聖書のみ、信仰のみ」であり、当時のローマ教会の「救いには人間の善きわざも必要である」という考えに対して、福音主義教会は「信仰義認」を高く掲げたのである。

信仰は全人格的なものである。それは、感情的な神秘的体験ではない。信仰は、神のみわざの事実とその意味に基づいており当然、知的認識を含むものである。このような信条・信仰告白・信仰基準もその表現において人間の理性において理解されるものである。しかしまた、それは単なる知的同意にとどまらない。信仰は意志的なものであって、神への信頼・服従を含むものであり、そして信仰告白としてあらわされる。この生き生きとした全人格的な信仰は、神への御言への真の応答といえよう。

さて、このような信仰は、神の備えて下さった救いを自分のものとするのであるけれども、それが、人間のわざであると考えられてはならない。確かに、信じることは、人間の行為ではあるが、信仰のもつ超自然的な要素を見落としてはならないのである。すなわち、信仰もまた神の与えて下さる賜物なのである。罪のなかで生きている人間、しかも神に敵対している人間が、神の救いのわざに入れられること、それは神の恵みに基づくゆえに可能なのである。

神の恵みは、特に主イエス・キリストにはっきりと現れている。すなわち、神に敵対している人間の責任を神ご自身が引き受けられ、イエス・キリストを通して神が信じる者たちの味方となられたのである。神の救いのわざは、この恵みによってなされた神の一方的な働きでありそれゆえに神の賜物なのである。ここに、人間の誇り、努力、あるいは敬虔も否定される。

② 聖霊のみわざ

三位一体の第三格であられる聖霊の主要な働きのひとつは救いの適用である。人間に罪を認めさせ、救いの必要を悟らせるのも、聖霊の御業である。

この信仰基準においては、特に新生ときよめ（聖化）が告白されている。霊的な意味で誕生することが新生であり、成長してゆくことが聖化と言うことができよう。

新生は、罪のうちに死んでいた人に対して、新しい霊的な生命を与えられることである。これによって、神の子とされ、人は神との交わりをもつことができるのである。それはまた死への勝利であり、永遠のいのちをもつことをも意味する。

次に聖化についてであるが、この点の細かな理解について、福音主義の教会にも種々の見解がある。しかしながら次のことは言うことができよう。「きよめ」とは、ヘブル語およびギリシャ語においても、語源から言えば、「分かたれること・区別されること」である。すなわち、神によって選び救われたことは、聖化の第一義の意味である。そしてさらにキリストのきよさを与えられることであり、日常の生活において、罪から離れ悪からきよめられ、やがては、キリストのみかたちに一致することである。このように聖化とは「選び分かたれ、聖別された。」という面からみると、新生と同時に起こる瞬間的なものであるが、また先ほど聖化を成長になぞらえたように、キリストのみかたちに至る漸進的なものということができる。このことは、また聖化には、成長すなわち程度の差があることを認めなくてはならない。キリスト者は聖霊によってきよさを求めるべきである。しかしながら、同時に「神に近づけば近づくほど、自分の醜さを知らされる。」ことも認めるべきではないだろうか。

このようにして、聖霊は、罪人に働きかけて救いに至らせ、救いを完成するのである。

参考 生まれることと造られること

新生について、C・S・ルイスは『キリスト教の精髓』という著書の中で、興味深い話をしている。鳥は木の上に巣をつくる。ビーバーは川の中にダムをつくる。しかし鳥は鳥を生み、ビーバーはビーバーを生む。人間もラジオをつくり、あるいは精巧な人形をつくることができる。しかし、それは人間ではない。人間は人間から生まれる。このように、神によってつくられるのみではなく神から生まれる時に、人は初めて、神の子となるのである。

(6) 第六項 教会

信仰は個人的な事柄であると同時に、共同体的でもある。私たちが救われたということは、各自が神の民に加えられ、その一員とされたことを意味している。「わたしたちの主」という表現にもあるように信仰による神との交わりは、救われた者の交わり、すなわち「聖徒の交わり」を生み出してゆく。ここに、教会が存在する根拠があるのである。

① キリストの体である教会

教会は、教会堂でも教会組織でもない。教会はまた教派でもない。教会は実にキリストの体で

ある。教会の真の構成員は、新生したキリスト者である。そして教会を教会たらしめているのは、キリストである。目に見えるところでは、教会も他の人間の組織や集団と同じように思える。しかし、教会はこの世界の中に存在しながら、神のものなのである。また、教会の主はキリストであるゆえに、主の再臨まで決して無くなることはないのである。

そしてまた、教会がキリストの体と言われるとき、復活し昇天した主が働かれる領域であり、またこの世に対して働きかける手段であることをも意味する。それゆえ教会は主イエス・キリストのみむねのままに生き、働かねばならないのである。教会はみことばと礼典（バプテスマと聖餐）を通し、礼拝と宣教そして奉仕をなすのである。

さらには、キリストの体であるといわれるとき、それは霊的な有機体であることを示している。教会を構成しているキリスト者各々は、キリストの体として、かけがえのない存在であり、他にあって代わることのできない働きをなしているのである。

② 一体である教会

真の教会が唯一であり、公同性を持つことは、キリストが教会の主であり、かしらであることの当然の帰結として言えることである。もちろん、その中には異端の教会は含まれない。しかし今日さまざまな教派・教団に分かれているけれども、真の教会であるなら、それらはひとつのキリストの体である教会を構成しているのである。

そしてこの教会は、全世界および全時代のキリスト者によって構成されており、いわゆる「目に見えない霊的教会」と呼ばれている。しかしながら、イエス・キリストがこの地上を歩まれたように、教会は同時に「目に見える教会」としてこの地上に具体的な聖徒の交わりとして存在している。

私たちは、具体的に連なっている地域教会を信仰の目をもってもう一度見直し、また各自がキリストの体に結び合わされ、それを構成している事実を、もう一度、考えてみる必要があるのではないだろうか。

あとかき

2002年5月、関東地区で「きやく合宿：信仰の土台の再確認～信仰基準の理解と実践～」が行われ、20数名の学生がその合宿に参加した。講師の服部滋樹K G K主事（本書の「信仰基準の今日的意義」を執筆）が、講義の冒頭において、「この合宿にこれだけ多くの人が参加してくれたことを大変嬉しく思います。これで関東地区K G Kもしばらくは安泰だと言っても良いでしょう。これは私の偽らざる正直な思いです」というようなことを語ったのだが、この言葉は私の中で強く印象に残っている。

もしもK G Kが、安泰ではなく、“やばい！”ということがあったら、それは一体どういう意味において“やばい！”ののだろうか。本書から引用するならば、「多くの人が信仰基準や教理、信条・信仰告白を冷たく無機質的なものと見る傾向」が“やばい！”ということなのだ。

実はこのやばさに対する警鐘が、20世紀の後半から、プロテスタント福音主義陣営において鳴り続けている（K G Kは福音主義の運動！）。それは、一般的には（かつての自由主義にも通じる）教理的神学の後退と消失というように理解されており、その特徴の一つとして先に挙げた「信条や信仰告白を重要視しない傾向」すなわち「信仰告白や信条の『化石化』」がある。現在のK G Kにおいても、このような傾向が否定できないのだとしたら、それは“やばい！”。「私たちの信仰の根拠は各自の経験のみならず、より客観的な言葉でもって外部の人に説明されなくてはならないの」だから。

本書が発行されることになったのは、そんなやばさに対して楔を打ち込みたいという思いからだ。本書のテーマがおそらく万人受けしないだろうということは重々承知の上、それでも関心がない人たちにこそ読んでもらいたい、考えてもらいたい、そして関心を持ってもらいたいという思いから、ブックレット作成に乗り切った。本書が、K G K学生の「信仰を自分の心の事柄としてのみ捉えたり、自分の信仰体験を信仰の基としているが、その体験を聖書の全体的な教えの上に基礎づけたり、吟味することがない」傾向や、「自分がイエス・キリストを信じて救われたことが、キリストの体なる教会に加えられたことでもあるのを十分に考えない」傾向、さらに「真理はますます個人主義化し、断片化される」傾向に、別れを告げるきっかけの一つになれば幸いである。そして、私たちの『希望を伝えるために』用いられることを願っている。

本書の作成にあたり、お忙しい中快く執筆をお引き受けくださった服部滋樹主事、また、今から約25年前になりますが、統一信仰基準解説書の執筆を担当してくださった油井義昭師、小林基人師（当時のK G K主事）に、心から感謝申し上げます。また、忠実に奉仕した規約問題委員の一人一人に、主の祝福がありますように。

関東地区主事 吉澤慎也

「希望」を伝えるために～信仰基準の意義と解説

2002年11月 初版発行

2016年3月 改訂版発行

発行者 キリスト者学生会主事会

発行所 宗教法人 キリスト者学生会

101-0062 東京都千代田区神田駿河台2-1 OCCビル3階

電話 03-3294-6916

FAX 03-3294-6050